

宋恵媛編・解説

# 在日朝鮮人文学 資料集

一九五四〜七〇

在日朝鮮人資料叢書14

本資料集の刊行意義

朝鮮戦争休戦以後の在日朝鮮人たちの精神史を辿る上での基礎資料。

在日朝鮮人文学研究における空白期間である一九五〇、一九六〇年代の実態解明に不可欠な資料。

一九四五年以後の韓国文学および朝鮮民主主義人民共和国文学研究の深化の一助となる。

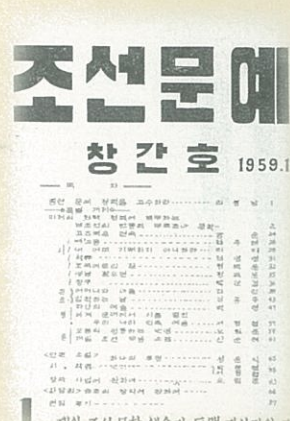
在日朝鮮人史、日本戦後史研究においても重要な文献。

当時の関係者たちへの聞き取り調査を重ねて収集。日本の国会図書館、公共図書館、大学図書館等には所蔵していない資料を多数収録。

体裁 全3巻・A5版・上製クロス装・ケース入り

定価 本体56,000円+税 ISBN978-4-89774-177-2

刊行 平成28年9月刊



## 祖国の統一のために

文化人会議文集 第1集



祖国平和統一南北文化交流促進在日文化人会議

植民地支配から解放された在日朝鮮人たちは、冷戦構造下で生まれた南北二つの国家、そして居住地である日本の政治状況に大きく影響されながらも、独自の文化・文学運動を展開した。日本の読者たちに広く認知されるようになる一九七〇年代以前、先の読めない朝鮮半島の混乱の渦に投げ出された在日朝鮮人作家たちは、何を考え、いかに現実と向き合い、どんな夢を見たのか。長い間、日の目を見ることのなかった、日本の中の一つ一つの文化、文学活動の軌跡を蘇らせる。

宋恵媛編・解説

# 在日朝鮮人文学 資料集

一九五四〜七〇

全3巻

## 在日朝鮮人 資料叢書 14

在日朝鮮人運動史研究会監修

緑蔭書房

### 在日朝鮮人資料叢書

在日朝鮮人運動史研究会監修

- 1 在日朝鮮人史資料 在日朝鮮人運動史研究会編 全2巻/240000円
- 2 在日本朝鮮人商工便覧 一九五七年版 在日本朝鮮人商工連合会編 60000円
- 3 戦後初期在日朝鮮人人口調査資料集 長澤秀編 全2巻/360000円
- 4 在日朝鮮人教育関係資料 佐野通夫編 全3巻/460000円
- 5 朝鮮人強制動員関係資料 山田昭次編(品切) 全2巻/240000円
- 6 在日朝鮮人留学生資料 裴玲美編 全3巻/540000円
- 7 在日朝鮮人警察関係資料 福井謙編 全3巻/480000円
- 8 在日朝鮮人生活保護資料 金歌昊編 全2巻/360000円

### 在日朝鮮女性 作品集

宋恵媛編/数多くの作品の中から二百編を選び出し、植民地以後の在日朝鮮女性の生活と思想を多角的に理解出来るように、一〇のテーマに分けて編集。全2巻/320000円

### 関東大震災 朝鮮人虐殺裁判資料

山田昭次編/裁判資料として現在知ることが可能な埼玉県(熊谷事件・本庄事件他)と群馬県(藤岡事件他)の地裁・東京控訴院判決書等を収録。全2巻/390000円

### 資料メディアの中の 在日朝鮮人

外村大・韓載香・羅京珠編/在日朝鮮人の動向・実態・状況を伝えた一般紙の特集記事・連載記事、また総合雑誌の貴重な記事(一九二〇〜四四)を収録。180000円

### 神奈川 朝鮮学校資料

大石忠雄編/在日朝鮮人学校問題の歴史的経緯とその実態を正しく理解するための原点的な資料(一九四五〜六〇)を中心に編集復刻した。全2巻/360000円

### 朝鮮人強制動員 韓国調査報告

龍田光司編/常磐炭田に戦時中、強制動員された朝鮮人の実態の解明と、韓国で被強制動員者の実態を当事者や遺家族から聞き取り調査した報告書。11月刊 全2巻/360000円

### 在日朝鮮人文学 資料集

宋恵媛編/一九五〇年代半ばから六〇年代を中心に刊行された、多彩な在日文学雑誌(朝鮮文化・韓国文芸・鳳仙花文芸等全一七誌)を収録した初の資料集。全3巻/560000円

### 日本朝鮮研究所 初期資料

井上學・樋口雄一編/戦後日本の朝鮮研究はこの様な形で新たな出発をし、どの様な課題を抱えていたのか、創設期及び初期の内部資料を収録。全2巻/価格未定

●下記の書店にお申し込み下さい。

### 緑蔭書房

〒173-0004 東京都板橋区板橋 1-13-1  
電話 03 (3579) 5444 FAX03 (6915) 5418  
[消費税が別途加算されます]

# 在日朝鮮人文学関連年表

- 一九四五年 九月 G H Qによる日本国内の刊行物、郵便物の検閲開始。在日朝鮮人発行の日文、朝鮮文の新聞・雑誌等も検閲の対象に（一九四九年一月まで）
- 一九四六年 『民主朝鮮』創刊号発行
- 一九四七年一月 文芸誌『朝鮮文藝』創刊号発行。日本語版六巻と朝鮮語版一巻を刊行
- 一九四八年 一月 在日朝鮮文学会結成。在日本朝鮮文学者会（四七年二月結成）が、芸術家同盟、青年文学会、白民社、新人文学会と合流して改称した。五九年六月まで続く
- 一九四八年 三月 金達寿『後裔の街』（朝鮮文藝社）刊行
- 一九四八年二月 李殷直『新編 春香伝』（極東出版社）刊行
- 一九四九年 九月 許南麒『朝鮮冬物語』（朝日書房）刊行
- 一九五〇年 六月 朝鮮戦争勃発
- 一九五〇年二月 大村収容所開所。外国人登録法違反者、朝鮮半島からの避難民、亡命者などを一時収容した施設
- 一九五二年一月 張赫宙、『嗚呼朝鮮』刊行後に日本に帰化。野口赫宙となる
- 一九五三年 学生、青年を中心に在日朝鮮人の文化サークル活動が盛んになる。川崎朝鮮人文化サークル（機関誌『大同江』）、東海朝鮮文化人協会（同『文化戦線』）、愛知文学サークル（『산하리（やまびこ）』）、兵庫朝鮮文化協会、鶴見朝鮮文化研究会（『朝文研』）、大阪朝鮮詩人集団（機関誌『チンダレ』）、福岡朝鮮人文芸同好会（『荒波』）等が結成される
- 一九五三年 七月 朝鮮戦争休戦
- 一九五五年 五月 金時鐘『地平線』（チンダレ発行所）刊行
- 一九五五年二月 ピョンヤン第二次朝鮮作家大会開催、総連傘下に入っていた在日朝鮮文学会の文学活動を評価。翌月、許南麒、南時雨、金民の三名が朝鮮作家同盟正盟員に選出される
- 一九五七年 七月 大村収容所内の「大村朝鮮文学会」による文学同人誌『大村文学』創刊号発行
- 一九五七年一月 『白葉』創刊号発行
- 一九五七年二月 許南麒、南時雨、姜舜の三人詩集『성곡에 드리는 노래（祖国に捧げる歌）』発刊。ピョンヤンで刊行された初の在日朝鮮人による詩集
- 一九五七年二月 金石範、『鴉の死』を『文芸首都』に発表
- 一九五八年 六月 「大村朝鮮文学会」会員を含む、大村収容所内の共和国送還希望者九六名が無期限ハンストを決行（二六日）。七月一〇日に二六名が仮釈放される

- 一九五八年一月 総連主流派との論争を経て、『チンダレ』が二〇号で終刊
- 一九五八年二月 『鷄林』創刊号発行
- 一九五八年二月 安本末子の日記『にあんちゃん』（光文社）刊行。日本の読者の間で反響を呼び、翌五九年に今村昌平監督により映画化される
- 一九五九年 六月 在日朝鮮文学芸術家同盟（文芸同）結成（委員長許南麒）。翌七月に大阪支部、一〇月に神奈川支部結成
- 一九五九年二月 朝鮮民主主義人民共和国への帰国第一船が就航
- 一九六〇年 一月 文芸同中央機関誌『문하리（文学芸術）』創刊号発行
- 一九六〇年 一月 一七歳向けの総連の雑誌『新しい世代』創刊号発行
- 一九六〇年 四月 韓国、四・一九学生革命により李承晩が大統領辞任
- 一九六一年 四月 民間、総連の文化人たちが「祖国平和統一・南北文化交流促進文化祭」共催。八月、「八・一五祖国解放一六周年記念合同文化祭」開催
- 一九六一年 五月 韓国、軍事クーデタで朴正熙が政権掌握
- 一九六二年 三月 総合雑誌『漢陽』創刊号発行。非総連系で唯一の朝鮮文雑誌
- 一九六二年 四月 文芸同中央、金日成誕生五〇周年を記念し作品集『산사（讚詞）』刊行
- 一九六二年一月 『韓国文芸』創刊号発行。民間系初の純文学雑誌
- 一九六三年 一月 『朝陽』創刊号発行
- 一九六五年二月 任展慧、『張赫宙論』発表。植民地期の朝鮮人作家の親日（対日協力）問題を追及
- 一九六五年二月 日韓基本条約、在日韓国人法的地位協定調印
- 一九六五年 朴元俊が新興書房設立。姜魏堂、金石範、呉林俊、李殷直らの著作等を出版
- 一九六六年 七月 立原正秋「白い罌粟」が第五五回直木賞受賞
- 一九六六年 九月 金鶴泳「凍える口」が文藝賞受賞
- 一九六七年 六月 文芸同第四次大会開催。前月の朝鮮労働党中央委員会第四期第一次全員会議、総連第八次全体大会での唯一の思想体制への移行を支持。この前後から作家たちの文芸同離脱が進む
- 一九六九年 三月 鄭貴文、鄭詔文兄弟が朝鮮文化社設立。金達寿と雑誌『日本のなかの朝鮮文化』刊行開始（八一年まで）
- 一九七一年 四月 朝秋月『宗秋月詩集』（編集工房ノア）刊行
- 一九七一年 七月 金石範「万徳幽霊奇譚」が第六五回芥川賞候補作に選出
- 一九七二年 一月 李恢成「砧をうつ女」が第六六回芥川賞受賞。外国籍作家として初
- 一九七二年二月 朴正熙、維新憲法公布。金日成が社会主義憲法を公布
- 一九七二年 ピョンヤンで在日朝鮮青年男女を対象にした第一回文学研修開催

## 刊行の辞

本書は、一九五〇年代半ばから一九七〇年代初めまでに刊行された、在日朝鮮人の文化、文学関連資料を集めたものである。朝鮮戦争（一九五〇年～一九五三年）、資本主義国から社会主義国への大規模な集団移住として注目された、在日朝鮮人たちの朝鮮民主主義人民共和国への「帰国」（一九五九年）、李承晩初代大統領を退陣に追い込んだ韓国の四・一九革命（一九六〇年）、在日朝鮮人の日本での法的地位や国籍選択にも多大な影響を及ぼした日韓基本条約締結（一九六五年）、金日成による唯一の思想体制の開始（一九六七年）等、朝鮮半島における激動の時代に生きた在日朝鮮人たちが、日本で書き、編み、刊行したものである。在日朝鮮人の精神史を辿る上で、大きな手がかりとなる資料群である。

この時期の在日朝鮮人文化、文学には、これまで光が当てられることは多くなかった。金達寿や許南麒、あるいは近年注目が集まった五〇年代の詩誌『チンダレ』の金時鐘を例外として、金鶴泳、金石範、李恢成、金泰生、高史明、呉林俊らの文学作品が認知されるようになる以前は、在日朝鮮人文学の「空白期」とみなされてきたのである。だが実際には、本書が示すように、文学的営為はこの時期にもたゆまず続けられていた。そして文学徒たちには、日本の文壇を目指す、南あるいは北における新たな国民国家の文学形成の動きに連なる、在日という固有性に向き合って創作する等、さまざまな信念や思想があった。日本の主流文化へ参入できず、かといって南や北の祖国との自由往来すらままならないなか、日本の地に縛られる形で行われた在日朝鮮人たちの表現活動。それは、文学とは、文化とは、ひいては民族や国家とは何かという、根源的な問いを私たちに投げかける。

本書収録資料には、在日本朝鮮人総聯合会（総連）関連の文芸誌、韓国系の総合文化誌、大村収容所内発行の文芸同人誌、大学生の同人誌等が含まれている。植民地期に創作活動を始めた一世、日本育ちの二世、朝鮮戦争前後の渡日者と、その書き手の背景も多様である。財政難のなか、各地で断片的に発行された雑誌の多くは、たとえば在日民族団体によって、「在日朝鮮人文学」として一か所に保存されることはなかった。むしろ、日本の国立国会図書館や日本各地の公共図書館にもほとんど所蔵されていない。このような長期間に及んだ資料の散逸、未整理という事実からも、脱植民地化という課題を共有しながらも、冷戦体制下で絶えざる内部対立や分裂に直面せざるをえなかった在日朝鮮人たちの、苦渋に満ちた歴史が浮かび上がる。だが、各誌に掲載された作品の一つ一つに、厳しい時代の中で当時の在日朝鮮人たちが鍛えた思想、そして豊饒な夢が刻まれているのも確かなのである。

宋恵媛（在日朝鮮人文学研究者）

## 収録資料（抜粋）

### 第一巻

- 一 「재민본 조선인 문학 예술가 동맹 가맹의 초안」他「在日本朝鮮文学芸術家同盟綱領（草案）」他（文芸同、一九五九年六月）
- 二 『문학예술』創刊号（文芸同中央、一九六〇年一月）

## 収録資料の概要

第1巻には、在日本朝鮮文学芸術家同盟（文芸同）関連資料を収録した。文芸同は、朝鮮戦争休戦後に総連と朝鮮民主主義人民共和国（共和国）が直結し、作家たちの相互交流が進むなか、一九五九年六月に東京で結成された。文学、演劇、音楽、舞踊、美術、映画等の文化団体の連合体である。「在日本朝鮮文学芸術家同盟綱領（草案）」他（一九五九年）、文芸同中央機関誌『文学芸術』創刊号（一九六〇年）、文芸同大阪支部発行『文芸活動』第二号（一九六一年）、文芸同東京都本部発行『群衆文芸』創刊号（一九六四年）、文芸同神奈川支部発行『朝鮮文芸』創刊号（一九五九年）で構成されている。文芸同中央発行の『文学芸術』以外の地方機関誌は、いずれも長くは続かなかったとみられる。文芸同の方針により、各誌での創作言語は原則として朝鮮語で、第一世代の朝鮮語作家のほか、日本生まれの二世作家たちも朝鮮語での創作に取り組んだ。だがその約三〇年にわたる刊行期間の中で、『文学芸術』誌は日本語版も二回発行している。本書では、その一回目である『文学芸術』別冊一号（一九六三年）も収めた。同誌の朝鮮語版では見ることのできない、多くの日本語作家たちの名が見られ、当時の総連組織の影響力の大きさをうかがわせる。

第2巻以降は、主に文芸同以外のサークルや団体が刊行した雑誌を集めた。第2巻には、大村収容所内でも一九五六年頃に結成された「大村朝鮮文学会」発行の文芸同人誌『大村文学』（一九五七年）、韓国を支持する民間系列の作家、画家、舞台人たちを広範囲に集め、七年間刊行された総合文化誌『白葉』（一九六一年）、在日南北文化人の相互交流事業の結晶である「統一文化祭」に際して編まれた文集『祖国の統一のために』（一九六一年）、総連の教師養成所である中央朝鮮師範学校（五三年一〇月創立）内に作られた詩サークルの同人誌『詩庭園』（一九五四年）、日本の大学教育を受けた二世青年たちが中心となって刊行された『学之光』（一九五七年）、『曠野』（一九六四年）、『風仙花文芸』（一九七〇年）の各創刊号を取めた。

第3巻には、文芸同文化人たちの共和国文化への接近と吸収過程がうかがえる『朝鮮文化』全三号（一九六二年）、文芸同の主流から外れた金達寿や張斗植ら、古くからの日本語作家が創刊した『朝陽』全二号（一九六三年）、第2巻収録の『白葉』の政治志向に反発し、純粋な文芸誌として発刊された『韓国文芸』全三号（一九六二、六三年）、古典から現代文学までの朝鮮文学の紹介を目的として、朴元俊が総連離脱後に創刊した『朝鮮文学』創刊号から第三号まで（一九六九年）を収録した。全て日本文雑誌である。

### 四 『詩庭園』創刊号（中央朝鮮師範学校詩人集団、一九五四年八月）

- 許南麒「天使図―天国図その一」（詩）
- 李沂碩「誰がおれたちを殺そうとしているか」（詩）
- 林朱華「伝説の中の漁村」（詩）
- 裴龍淑「あゆみ」（詩）

김민 「바닷길」(「金民」海の道)①(小説)  
한덕수 「공화국 대표 환영가」(韓德錫「共和國代表歡迎歌」)(歌詞)  
허남기 「조선과 일본과의 사이의 바다」(許南麒「朝鮮と日本との間の海」)(詩)  
남시우 「귀국 첫배가 뜬다」(南時雨「帰国第一船が出る」)(詩)  
김윤호 「조국이 보이는 곳에서」(金允浩「祖国が見える場所」)(詩)  
장순 「이날 이 때까지」(姜舜「この日の時まで」)(詩)  
한우영 「미술 창작에서의 문제점」(韓宇英「美術創作での問題点」)(評論)  
김장안 「귀국선」을 상징하고서(「金長安」帰国船を上映して)(評論)

三 『문예활동』(文芸活動) 第二号(文芸同大阪支部、一九六一年九月)

조남두 「미군 좌파에 대하여 죽은 소년」(趙南斗「米軍ジープにひかれて死んだ少年」)(小説)  
김재남 「남풍장 주인」(「金在南」南風荘の主人)(小説)  
정인 「대포와 꽃」(鄭仁「大砲と花」)(詩)  
홍윤표 「한여름」(洪允杓「真夏」)(詩)  
오상홍 「三·一 췌기 대회에서」(吳尙弘「三·一 蹶起大会にて」)(詩)  
고봉전 「잊지 못할 광동무」(高蓬全「忘れられない郭東ムム」)(隨筆)  
김석범 「전향과 문학」(金石範「転向と文学」)(評論)

四 『군중문예』(群衆文芸) 創刊号(文芸同東京都本部、一九六四年五月)

허남기 「군중 문예」발간에 대하여(「許南麒」群衆文芸 發刊に際して)  
정백운 「이 원한을 풀게 하라」(鄭白雲「この恨みを晴らさせよ」)  
정화수 「세상을 바로 보라」(鄭華水「世の中を正しく見よ」)  
강순 「붉은 열매」(姜舜「赤い実」)(詩)  
최선휘 「과녁을 쏘아라」(崔ソルヒ「的を撃て」)(詩)  
오상홍 「그 날을 위하여」(吳尙弘「その日のために」)(詩)  
김하열 「야밤의 일터」(金學烈「深夜の仕事場」)(詩)  
김명두 「편지」(金秉斗「手紙」)(小説)  
박종상 「정생」(朴ジョンサン「更生」)(小説)

五 『文学芸術』別冊第一号(日本語版)(文芸同中央、一九六三年九月)

許南麒 「檻ノ中デウタウウタ」(詩)  
金時鐘 「大阪港」(詩)  
韓美妃 「遠い国でないことを」(詩)  
張斗植 「婿養子」(小説)  
金秉斗 「魂」(小説)  
朴元俊 「渡航物語」(小説)  
金達壽 「二つのエピソード」(隨筆)  
林吳相 「心の中の距離」(隨筆)  
李殷直 「母死す」(隨筆)  
吳林俊 「土井大助のこと」(隨筆)  
朴春日 「川端康成氏への手紙」(書簡)



六 『조선문예』(朝鮮文芸) 創刊号(文芸同神奈川支部、一九五九年二月)

장순 「고즈넌은련속」(姜舜「物静かな連続」)(詩)  
김주태 「배고동」(金宙泰「船の汽笛」)(詩)  
정백운 「조국애로의 길」(鄭白雲「祖国への道」)(詩)  
김민 「어머니와 아들」(金民「母と息子」)(コント)  
김홍주 「입학하는 날」(金ホンジュ「入学の日」)(コント)  
백영 「과산의 예술」(白玲「破産の芸術」)(評論)  
오림준 「오늘의 생동하는 반영」(오영 「오늘의 조선전」에 전신(ママ)시)  
된 미술 작품들을 보고(「吳林俊「今日の生き生きとした反映」へ今日の朝鮮展」に展示された美術作品をみて)  
성운식 「하나의 투쟁」(成允植「一つの闘争」)(小説)

第2巻

一 『大村文学』創刊号(大村朝鮮文学会、一九五七年七月)

朴昌大 「祖国の空―祖国がほくらを呼んでいる」(詩)  
趙相善 「医務室で」(詩)  
鄭憲成 「大村収容所の空」(詩)  
金春一 「手紙」(隨筆)  
浅田石二 「日本政府の暴力に怒りを感じず」(隨筆)  
岩松良子 「解放のために」(隨筆)  
李綿生 「中朝友好はみんなのねがい」(隨筆)  
安英二 「血ぬられた手帳」(小説)  
楊柱錫 「逢瀬」(小説)  
金田植 「断崖」(小説)

二 『白葉』創刊号(白葉同人会、一九五七年一〇月)

金学鉉 「一つの現実」(隨筆)  
李盛夏 「ほのかな一瞬」(詩)  
崔鮮 「ペンに托する期待―第二十九回国際ペン大会に思う」(隨筆)  
車徹 「眼と鼻と耳」(詩)  
洪万基 「日陰」(小説)

三 『祖国の統一のために―文化人会議文集』第一集(祖国平和統一南北文化交流促進在日文化人会議、一九六一年八月)

許南麒 「わたしはここに一枚の地図をもっている」(詩)  
崔鮮 「祈禱」(詩)  
金達壽 「統一への夢」(隨筆)  
申鴻湜 「統一のための闘い」(隨筆)  
金慶植 「キムチの味」(隨筆)  
崔東玉 「朴正熙よ心してきけ」(隨筆)  
趙大勳 「芸術は祖国と共に」(隨筆)  
安道雲 「祖国のために」(隨筆)  
金順明 「団結は幸福への道」(隨筆)  
郭仁植 「つばやき」(詩)  
任秋子 「感激」(隨筆)  
鄭泰裕 「生活の真实性」(隨筆)



五 『学之光』創刊号(法政大学朝鮮文化研究会、一九五七年二月)

尹学準 「三・一運動と朝鮮近代文学」(評論)  
朴春日 「法政出身の朝鮮作家」(隨筆)  
任展慧 「日本文学と私」(隨筆)  
林芳史 「ZHEHJIAN」(小説)  
姜植基 「未来なき星に」(詩)  
金総領 「たこの木と獅子」(詩)  
朴徳成 「人間標本」(詩)  
朴閔 「文芸学雑感」(評論)  
聖化 「晦洪」(詩)

七 『鳳仙花文芸』創刊号(鳳仙花文芸同人会、一九七〇年)

朴炳涉 「エセ農民文学と常緑樹精神」(評論)  
李幸子 「ヴェトナムの少女に」(詩)  
文景淳 「湿地地帯」(小説)  
全石潐 「パンチヨツパリ(半日本人)」(小説)

第3巻

一 『朝鮮文化』創刊号(朝鮮文化社、一九六二年七月)

李丞玉(訳) 「朝鮮労働党の文芸政策」(評論)  
安宇植 「作家紹介Ⅰ 韓雪野」(評論)  
朴元俊 「友好雑感」(隨筆)  
白玲 「朝鮮美術界の動向」(評論)  
影 「あふれ出た統一の声」(南朝鮮の文学雑誌から)(評論)  
許南麒 「朝鮮の文学について」(評論)  
ジョン・トングウ(李錦玉訳) 「展览会場にて―原爆の図をみて」(詩)  
安宇植 「作家紹介Ⅱ 李箕永」(評論)  
影 「怒りの吐露―南朝鮮の文芸雑誌から」(評論)

二 『朝鮮文化』第三号(一九六二年九月)

宋影(訳) 「作家と現実」(評論)  
朴八陽(訳) 「カッパの頃の回想」(隨筆)  
安宇植 「作家紹介Ⅲ 李北鳴」(評論)  
「朝鮮の文学者は何を考えているか」(アンケート)  
資料 「朝鮮映画」誌一九六一年度総目次

二 『朝陽』創刊号(リアリズム研究会、一九六三年一月)

鄭貴文 「傷痕」(小説)  
姜魏堂 「古里の会」(小説)  
南輝 「嵐の記録」(ラジオドラマ)  
金時鐘 「春を想う」(詩)  
張斗植 「ある在日朝鮮人の記録」について(隨筆)  
姜文字 「旅」(隨筆)  
金民柱 「ある密航者の話」(隨筆)  
尹学準 「正月の想い出」(隨筆)  
金達壽 「高麗神社と深大寺」(隨筆)  
朴春日 「戦後日本文学における朝鮮像①」(評論)  
第二号(一九六三年三月)  
霜多正次 「学生時代の金史良」(隨筆)  
鄭貴文 「民族の歌(第一回)」(小説)  
金達壽 「一九六三年一月」(小説)  
朴永泰 「朝鮮文庫」への夢(隨筆)  
鄭貴文 「国際スケート大会を観て」(隨筆)  
朴春日 「戦後日本文学における朝鮮像②」(評論)

三 『韓国文芸』創刊号(韓国文芸社、一九六二年一月)

劉振植 「動きと音のシンクロナイズ」(1)(隨筆)  
金学鉉 「住いの弁」(隨筆)  
鄭達鉉 「先乗り」(隨筆)  
金潤 「この記憶すべきこと」(詩)  
朴水卿 「武蔵野」(詩)  
安道雲 「雪の降る夜」(戯曲)  
金慶植 「灰色の雲」(小説)  
李顕雄、郭仁植、金潤、安道雲、金慶植(司会) 「現状あれこれ―秋夜放談」(座談会)

三 『韓国文芸』第二号(一九六三年五月)

具仲書(翻訳) 「韓国文化人気質の批判」(評論)  
康玄哲 「救国文学運動の提唱」(評論)  
金潤 「おたまじやくし」(詩)  
張萬榮 「世代と世代の交代」(詩)  
金慶植 「地図」(小説)  
「天坂の声―劇団「黄土」を迎えて」(座談会)  
白鉄(翻訳) 「戦後十五年の韓国小説」(評論)  
李健 「芸総」―その存立の条件(評論)  
金泰伸、郭仁植、洪久城、金慶植、金潤、安道雲 「秋夜放談―在日美術家の諸問題」(座談会)

四 『朝鮮文学』創刊号(新興書房・朝鮮文学研究会、一九六九年六月)

崔曙海(翻訳) 「脱出記」  
朴趾源(翻訳) 「許生伝」  
朴元俊 「作家略伝Ⅰ 新傾向派・崔曙海小伝」解説  
姜魏堂 「在日朝鮮青少年諸君へ」(隨筆)  
「朝鮮文学」第二号(一九六九年七月)  
朴元俊 「高麗門」(隨筆)  
金浄(翻訳) 「濟州風土記」  
北載昶 「新羅郷歌二首」(古典翻訳)  
「朝鮮文学」第三号(一九六九年八月)  
李孝石(翻訳) 「蕎麦の花咲く頃」  
朴元俊 「二つのエピソード」(隨筆)  
北載昶 「深大寺(朝鮮の遺蹟Ⅰ)」(隨筆)